

白バラ通信

No.13

神大教職員九条の会講演会と第3回総会のご案内

7月30日(木) 18:00から。理学部Z棟103室

講演会 18:00-19:00

「世界の中の第9条－国際民主法律家協会ハノイ大会に
参加して－」

五十嵐正博さん (神戸大学国際協力研究科)

第3回総会 19:00-19:30

・活動報告 ・会計報告 ・活動方針 ・役員承認

<総会講演によせて>

国際民主法律家協会は1946年10月設立された民主的な法律家の国際連帯組織で、世界全域から90余国の法律家団体が加盟している。国連発足当初から経済社会理事会の正式非政府組織(NGO)として登録され、国連でも発言権を持って活動している。

国際大会が4年に1度開催されており、2005年の第16回大会はフランスのパリで開催された。この大会には五十嵐先生と共に、教職員九条の会の事務局をしている海事科学部の岡田順子先生も参加されている。このパリ大会では大会決議として、「日本国憲法第9条についての決議」が採択されている(「決議」は別掲)。この決議は、「第9条は、人類の希望の原理を指し示している。人類の宝であるといっても過言ではない。」と指摘している。



第17回大会がベトナムのハノイで6月6日から10日にかけて開催された。このハノイ大会で、改めてパリ大会で決議された「日本国憲法第9条についての決議」が再確認されたという。ハノイ大会に参加された五十嵐先生によると各国の代表団から様々に日本国憲法第9条についての発言がなされたという。

五十嵐先生からハノイ大会の様子を聞くと共に、「世界の中の第9条」についてのお話を聞きたいと思います。どうぞふるってご参加くださいますようにお願いいたします。(和田進 神戸大学教職員九条の会事務局長)

国際民主法律家協会(IADL)第16回パリ大会決議(2005/6/11):「日本国憲法第9条についての決議」

我々、フランス・パリで行われている第16回IADL大会に出席している法律家は、平和のために奮闘してきたIADLの歴史を想起しつ

つ、以下のとおり決議する。

1946年に制定された日本国憲法第9条（以下、「第9条」という。）は、一切の戦争放棄を定めている。それゆえ、同規定をめぐって、日本の平和勢力と保守勢力は約60年間にわたって激しい対立を続けてきた。1990年代に軍事大国化の道を歩み始めた日本の保守勢力は、ここ数年のうちに第9条を廃棄するための具体的な動きを開始している。IADLは、第9条の改訂問題が、日本の国内問題にとどまるものではなく、国際社会の重大問題であることを確認する。なぜなら、第9条は、第2次世界大戦とアジアの植民地支配を反省した、日本の国家・民衆の世界の国家・民衆に対する平和の誓いだからである。

IADLは、日本軍がアメリカ軍と一緒に肩を並べて世界各地で軍事力を行使することを容易にするために第9条を変えることに反対する。アメリカの戦争行為への日本の大手を振っての参加は、世界の平和への重大な挑戦以外の何物でもない。また、21世紀に戦争のない世界をつくりあげるとは、人類の悲願である。それゆえ、第9条は、人類の希望の原理を指し示している、人類の宝であると言っても過言ではない。人類の希望の原理を指し示している、人類の宝を破壊することは絶対に許されない。

したがって、IADLは、第9条改悪阻止のために奮闘している日本の法律家・人民を支持し、世界の法律家・平和を愛する人民が大きな連帯の輪をつくりあげてくれることを心から呼びかけるものである。

神戸大学教職員「九条の会」に寄せて

鈴木 克実（神戸大学教職員九条の会事務局）

「私たちは、平和を求める世界の市民と手をつなぐために、あらためて憲法九条を激動する世界に輝かせたいと考えます。・・・日本と世界の平和な未来のために、日本国憲法を守るという一点で手をつなぎ、「改憲」の企てを阻むため、一人ひとりができるあらゆる努力をいまずぐ始めることを訴えます。」（「九条の会」アピール 2004年6月10日）

井上ひさし氏、加藤周一氏など日本の良心を代表する9氏の呼びかけで始まった「九条の会」は全国津々浦々に広がり、いまや地域・職場・学園に7400を越える会が結成された。平和を求める全国的なネットワークがこれほど広がっているのは、1960年の安保条約改定阻止を求める会以来、いやそれ以上のことであろう。

この国民的運動を前にして、国会で2/3以上の勢力を得た改憲勢力が一気に明文改憲によって「戦争のできる日本」につくり変えようとした野望は足踏みを余儀なくされている。戦後60年余り、平和憲法が国民のなかに根付いていることを実感させられる。

もちろん改憲勢力が手をこまねていることはない。明文改憲がすぐにできなくても「解釈改憲」で、法律で憲法をないがしろにし、海外に自衛隊をいつでも出動させるところまで事態を進めている。明文改憲についても2010年5月から「国民投票」が可能になるのをとらえてその推進を策謀している。一つ一つの企てに対してたたかうことを止めてしまえば彼らの思う壺である。

「神戸大学に教職員の九条の会をつくろう」と有志が集ったのは2005年4月。それから9ヶ月を経て2006年1月27日に結成総会が開かれ、160名を越える会員が結集する会として発足した。

神戸大学に平和を希求する運動の核が生まれたのは特記すべきことではなからうか。神戸大学でも60年安保、70年安保のときには高揚した運動があったが、それは教職員組合が中心にすわり、組合の運動として進められたものである。

いま組合がストレートに平和の問題や政治の問題にリーダー的役割を担うことがむつかしくなっている。組合の組織率が落ちていることも一因であるが、経済の高度成長期、バブル期を経て低迷そして経済危機を迎えて「この指とまれ」式ではなかなか人は集わない。とりわけ大学においては価値観

の多様性が重視され、平和や政治の課題について組合がひとつの方向に向かうことに批判的であることが多い。

こうした中であって、憲法を守るという一点で「九条の会」が神戸大学で発足し、しかも 160 名以上の方が参加するというのは何とも頼もしいことだ。そして企画する集いには数十名、ときに 100 名以上の方が参加し、感銘も与えていることはすばらしい。最近になって学生にも九条の会が発足してきていることもうれしい。取り組みに強弱があることは常である。「継続は力」、この言葉に支えられ、粘り強く「九条の会」が教職員の間にさらに広がりをもったものにしていきたい。

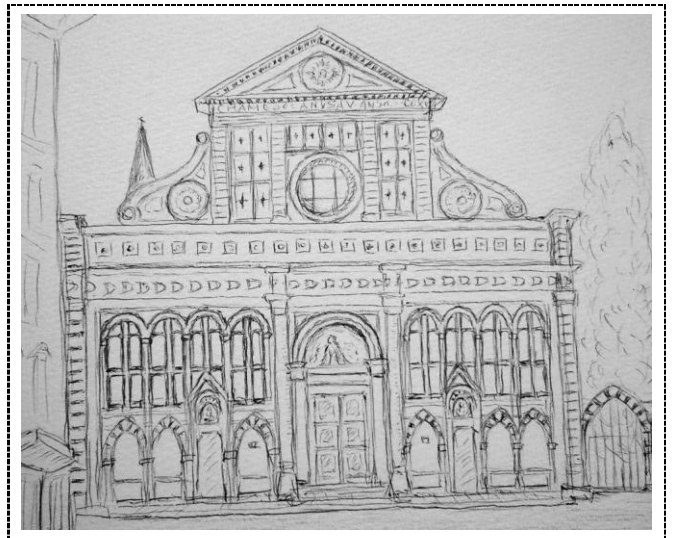
私は本部組合の書記の任を離れ、このたび医学部病院支部の書記としてお手伝いすることになったことにより、会の事務局からははずれるが、病院の教職員のなかに「九条の会」が根付き広がるよう、力を尽くしてみたいと思う。

イタリア旅行記 (フィレンツェ散歩)

尼川大作 (神戸大学 OB、白バラ通信編集担当)

この 4 月はじめのこと、イタリア中部に出かける機会があった。ルネッサンスで栄えた「花の都フィレンツェ」への、連れあい同伴のスケッチ旅行であった。まずは、フィレンツェ市街を偵察。這い上がるようにして登ったジョット鐘楼の頂上からは、ドゥオーマ (大聖堂) のドームを間近に、遠く郊外まで見渡すことができた。伽藍壁面は青緑、黄、赤など天然の大理石を組み合わせて造られており壮大にして華麗。摩耗が進み踏み入れ禁止の石床もあった。イスラム圏も含め世界各地から人が来ており、4 月は修学旅行の時期なのか学生も多い。

中世の歴史的な建築物ヴェッキオ宮殿は、14 世紀の建築だが、今でも市庁舎の機能をもち絵画の殿堂となっている。隣接のウフィッツィ美術館は、「ヴィーナスの誕生」など美術史に残る代表的絵画が多いが、入口付近はあまり動かぬ長蛇の列で、残念ながらパス。しかし宮殿では、各部屋の壁から天井全体を占めた絵画の群を十分堪能できた。昔、代議員半数が集まった 500 人ホールを初めとして、ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロらの絵画や彫刻など多数が展示されている。メディチ家礼拝堂・サンロレンツォ教会複合体のひとつ、ラウレンチアーナ図書館にも入ってみた。昔の本が大判のため閲覧台も大きい。羊皮紙版など本の歴史を展示したところがあり、面白かった。駅近くの広場にあるサンタ・マリア・ノヴェッラ教会は、今にその華麗な外観を引き継いでいる。その内部に中世から存続の薬局とダ・ヴィンチのモナ・リザ制作の場となった法皇の間は有名。



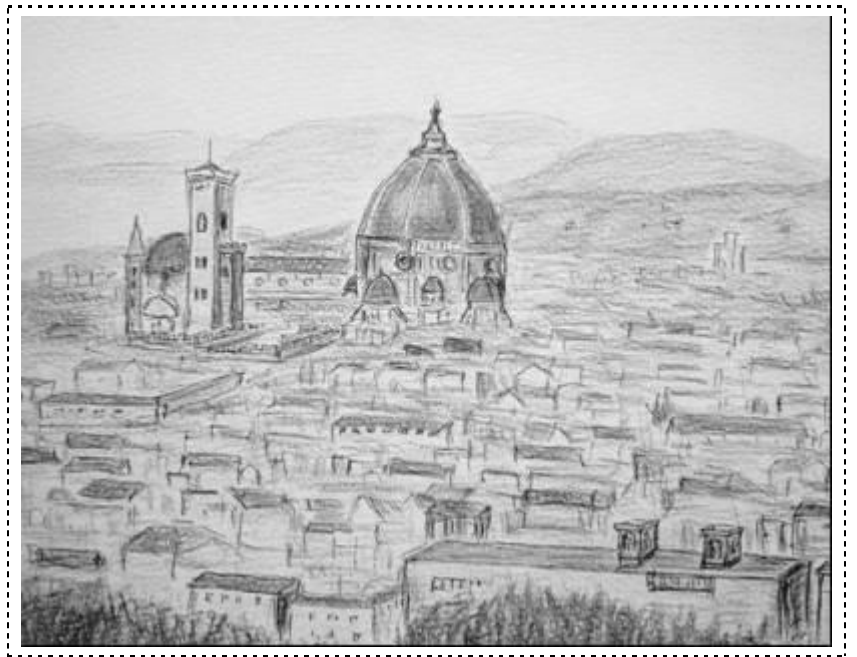
メディチ家の権勢は凄まじいほどだったらしい。6 個の玉 (丸薬?) をあしらったテントウムシの背面のような紋章があちこちに。薬屋 (メディスン) と銀行家から身を立て勢いを得て、共和国僭主 (せんしゅ) や大公を輩出。18 世紀に断絶するが、その文化遺産は護られて現在も光輝いている。

街角によく見る何げないフレスコ画聖人像も色褪せてなお一層の気品がある。日本の道祖神や地藏さんに相当する庶民的存在なのだろうか。田園もいいが街を歩くのも面白い。ショーウィンドウの飾り付けにもセンスがあり、ファッションの街でもあることを認識する。しかし愛想よい店は多くはな

い。「ヴォンジョールノ」とまず挨拶するのは客の方。「何もしないでも世界中から来てくれるから」という感覚だ。泊まったホテルも一応星の並ぶところで重厚な感じであったが、設備が旧式で、快適とは言いがたかった。バスタブが中途半端な深さで、底の半分を占める半球状の窪みがあり、そこに腰を入れてあぐらを組んだ状態で後ろに体を倒すと、いくぶん窮屈だが首から下がなんとか浸かる程度になる。風呂好きな日本人の涙ぐましい努力を設計者(?)は考えてみたことがあるのだろうか。街はずれの少し小高いところにあるミケランジェロ広場から市街を見下ろすと、街中央を通り抜けピサに至るアルノ川が流れている。ドゥオーマを中心に広がる美しい町を展望できる。古くからの城壁が街を遠巻きにするように残っており、上部の崩れかけているところが妙な懐かしさを誘いこむ。

見物の合間に、さまざまなカフェ・テラスでピザ、パスタなどよく食べた。バルサミコとオリーブ油の使い方が上手だ。6日目に、素朴だがこれぞ本場というイタリア料理レストランにやっと出会えた。

今年はガリレイによる宇宙観測400年記念の年(世界天文年)。市内の自然博物館でも展示会が催されていた。ピサにバスツアーで出かけ、振り子の等時性発見のきっかけになったと伝えられる長い吊り蜀台のある大聖堂、そして落下実験で有名なピサ斜塔(落下実験そのものはなかったとする説もある)を観る事が



出来た。ここも人が多い。イタリアでは現在でもよく目にすることができる屋上テラスは、夜の天体観測向きだったらしい。「それでも地球は回っている」の地動説は今や平凡な常識。ガリレイの栄光と苦難の地フィレンツェに立つと、あらためて「真理の強さ」というものに心励まされる気がする。彼の墓は紆余曲折の後、サンタ・クロッチェ教会に納められている。



滞在して1週間。35枚のスケッチと土産を手し、ローマ経由で帰途につき機上の人に。日本まで約13時間の飛行。人間の叡智と手技の結晶を見てきた満足感があつた。ところで日本にも世界遺産はいろいろあるし負の文化遺産としては原爆ドームもあるが、世界に誇れるものがどのくらいあるのだろうか、ふと考えてしまった。むしろ、形こそないが戦争放棄を誓った日本の憲法第9条はまさに世界に誇れるものだ。100年後にその発祥の地日本を訪れる人たちがあつたらうかなどと妄想しているうち、眠りにおちていった。

<スケッチはいずれも筆者。「ヴェッキオ宮殿」(1ページ)、「サンタ・マリア・ノヴェラ教会正面」(3ページ)、「ミケランジェロ広場からみた市街」、「O教会裏通り」(4ページ上、下)>